

第 11 回駿河海岸保全検討委員会_委員意見（まとめ）

1. 住吉工区の粘り強い海岸堤防の構造検討について（資料1）

●A 工区

・A 区間の基礎位置が高い区間は C 区間の状況と似ているので、C 区間の対策を参考に検討すれば良いと思います。

・A 区間の写真から部分的に松が斜めに生長している区域があるように見えます。成長の早い段階（若い段階）で背後盛土に何か変化が起こったためこのようになったのか、可能であれば確認しても良いと思います。（この区間は伐採の必要が無いとのことで特に工法に影響するものではありませんが）

●B 工区

・昨年度の実験とは異なり、破堤遅延時間の目標値を満たすようになった理由や機構を整理すべきではないか。昨年度の caseB-2 では基礎工際の洗掘深が基礎工下面にまで達したが、今年度の実験では達していない。これは矢板による止水が地盤内の間隙水圧の変化に影響し、砂粒子が動きにくくなることで洗掘を低減したということか（それとも基礎工上面の平場が昨年度より長いのか）。また、矢板によって基礎工が動きにくくなることで、堤体の損壊を免れたのではないか。

・方策とは論点が異なるかも知れませんが、B 区間の裏法は現場打ちでは無くブロックになっているのは短期施工と考えてよかったですでしょうか。

●C 工区

・「背後の松」をどの程度考慮すべきかどうかは、現場の景観や背後地のスケール感をもとに検討すべきと思います。今回は現地視察が中止となりましたが、次の機会にぜひ視察のうえで議論したいと思います。

・caseC-1 は松の効果（幹・枝による越流水の減勢、根による侵食の軽減）が考慮されていないが、それを考慮することで他の工区で設定している破堤遅延時間 3～5 分を確保できる可能性がある。松を伐採して対策を実施することで逆に危険な状態になることがないよう、松の効果を検討することで caseC-1 により破堤遅延時間が目標値を満たすのか否か検討した上で、松の伐採を前提とする改良案①～④と比較することが望ましいと考える。

s 2. 新たなモニタリング手法の導入方針について（資料2）

- ・河川砂防技術開発制度による委託研究により、VHF レーダや漁船ビッグデータなどによる海底地形モニタリング技術が開発されている。その成果も参考にして、モニタリング手法を検討することが望ましい。
- ・越波の要因の一つは、海底谷等の複雑な海底地形による波の屈折による波の局所的な集中と考えられる。その要因分析には、NMB 測量等により海底地形を面的に把握するとともに、CCTV 等を活用して高波浪時のうちあげ高や越波範囲の沿岸方向分布を把握することが必要である。また、駿河海岸での潮位にはサーフビートなどの振動が載っている可能性があることから、駿河海洋観測所の波高計が測定している水位（0.5 秒毎）において高波時に長周期成分がどの程度の大きさになっているか確認した上で、その平均水位（毎正時 20 分間）と焼津港内の潮位観測値との間に差があるか確認することが望ましい。
- ・CCTV の画像が活用できるは非常に大きなメリットだと思います。特にこの海岸はカメラの密度が高くここでの成功事例は全国に展開できると思います。
- ・UAV による陸上の地形観測も不定期にはなりますが逆に必要なときに（イベントの際に）測量できるのはメリットだと思います。
- ・一方、水中部のグリーンレーザーやマルチナロービームは高価である上、機動性もそれほど高くないので他の手法も継続する必要があるように思います。最近、いくつか安価な水中ドローンがでているのでその活用も考えられるかと思います。一つについて試してみよう予定があるので結果が得られれば紹介させていただきたいと思います。
- ・将来直轄事業が完了した後、県が当該海岸で持続可能なモニタリングが実施できるよう効率的かつコスト縮減をふまえた手法の検討をお願いします。

以 上